

～旧約聖書を読んで感じること～ (52) サウル王、退けられる

サウルはイスラエルに対する王権を握ると、周りのすべての敵、モアブ、アンモン人、エドム、ツォバの王たち、更にはペリシテ人と戦わねばならなかったが、向かうところどこでも勝利を収めた。彼は力を振るい、アマレク人を討ち、略奪者の手からイスラエルを救い出した。…サウルの一生を通して、ペリシテ人との激戦が続いた。サウルは勇敢な男、戦士を見れば、皆召し抱えた。(サム上 14:47-52)



サウル王 Rembrandt

サウルの得意の武術は槍だったのか、彼は常に槍を手にして描かれているようです。サウルは大男で勇敢でしたから、果敢に各地で戦いを展開していきました。民族対民族の支配、利権の争いを巡り、この戦いのために様々な武器(槍、剣、弓矢、こん棒、盾等)や戦車を大量に作り、攻撃、防御などの作戦を練り、サウルは常に臨戦態勢でいたことでしょう。この緊張状態にあって、サウルをさらに苦しめたのは、民からの評価と優れた部下への猜疑心でした。サウルは、神が自分を選び、使命を与えたと信じ、神の言葉を求め、従順に祈り求める人間ではなかったのです。見た目が立派なため高く評価されてきたため、外面性が大事であると思い、人に認められることに重きを置いたのです。人の評価に一喜一憂する、気を病む人間となってしまいました。そして自分の威信を示し、実力を顕示すべきであるという強迫観念から抜け出ることができませんでした。

「報復する前に食物を口にすると者は呪われよ」と命じて、兵士に断食を命じて戦闘させたり、滅ぼし尽くせとサムエルに命じられているのに、上等なものを戦利品として持ち帰り、神への供え物にするためと言い訳したり、カルメルという町に自身の戦勝碑を建てるなどして、サムエルを悲しませました。イスラエルの民を慈しむ王ではなく、金品に心奪われる王であり、神に聞き従うより、自分の力を誇示する王であるとサムエルは思い、サウルを選んだことを悔い、サウルに告げました。

サムエルは彼に言い渡した。「今日、主はイスラエルの王国をあなたから取り上げ、あなたよりすぐれた隣人にお与えになる。」 サウルは「わたしは罪を犯しました。しかし、民の長老の手前、イスラエルの手前、どうかわたしを立てて、わたしと一緒に帰ってください。そうすれば、あなたの神、主を礼拝します。」(サム上 15:28-30) と恭順な態度を示しましたが、この後、サムエルは二度とサウルには会うことはありませんでした。

サウル(1082 BC-1010 BC)の王としての在位は40年であると記されています。長い間、主からくる悪霊がサウルを苛むようになりました。多くの勇敢な男を家来として召し抱えました。その中にダビデがいました。ダビデは豎琴を奏で、サウルを慰めます。けれどもダビデが殊勲を立てれば立てるほど、サウルはダビデの評判が気がかりとなり、謀反を恐れ、ダビデを狙う内戦まで始めてしまいます。そのような中、サムエルの死の知らせが来ました。サウルは不安に駆られ、サムエルが禁じた口寄せの女にサムエルを呼び出してもらいます。サムエルはなぜ主に尋ねないのだ、主はイスラエルをペリシテの手に渡すと告げました。



サムエル、サウルに現れる William Blake

その言葉通りに、サウルはギルボア山での戦闘で深手を負い、敵になぶりものにされたくないと思い、自分の剣を取り、その上に倒れ伏し自死しました。三人の息子達も死にました。サウルに追われて逃げていたダビデは、サウルの死を知り、哀悼の歌「弓」を歌って悲しみました。